



真珠の水彩。

水のメディウム



透明水彩に特殊な効果を与えてくれるメディウム。それが、イリデッセントメディウム。真珠のような輝きと光沢、そしてきらめき感が出る。絵具と混ぜて使用するだけでなく、このメディウムのみを乾燥後の画面上に塗っても独特の効果が得られるだろう。他にも、絵具を自作したり、滲みを作ったり、タッチを変えたり、マスキングをして、白抜きをしたり。そんな新しいテクニックが新しい作風を生み、水彩の世界が広がっていくのを体感していただきたい。お近くの画材店で。<ホルベイン水彩用メディウムシリーズ>



holbein

holbein

押江千衣子

林 洋子 || 文 福永一夫 || 写真 *

「なんでもない、静かなふつつの風景をもとめて」



1995年初頭、京都市立芸術大学大学院のアトリエにて。後輩の木村友紀が撮影。このころ制作した大学院修士制作を中心に、東京のINAXギャラリー2で個展を開く



Shocking Pink 1994
130×162cm キャンバスに油彩、オイルパステル、水彩 個人蔵

1995

「大学院を終える時期にやった東京での個展で初めて評価され作品も売れて、画家になるきっかけになりました」

3月下旬、春まだ浅い晴天の日、大阪郊外のアトリエ兼自宅に押江千衣子を訪ねた。ここは彼女が生まれてから長らく暮らし、制作してきた場所である。彼女は2003年秋からその大切な場所を2年間離れてベルギーで生活、制作し、昨秋また戻ってきた。フランス語とドラマン語が入り混じる複雑な文化構造を持つ国での強烈な異文化体験を経て、画家は暮らし慣れた場所での制作ベースを少しずつ、そして確実に取り戻しつつある。

幼いころから絵を描くことが好きだった押江は、高校時代に「描くことに、自分の場所を見出す」ことを確信し、美大進学を決意したという。京都市立芸術大学 油画専攻への入学は1989年。京都芸大出身者を中心とした「関西・ユウエブ」への東京からの関心がたいへん高まっていた時期にあたる。もともとデッサンが得意で、学部時代から植物もよく描いていた。けれど、ドローイングの楽しさは、油彩で本画を描く段



オアシス 2001 227.3×324.2cm キャンパスにオイルパステル、油彩 東京オペラシティアートギャラリー蔵

2001 「ベルギーでファン・エイクの祭壇画を見て、500年以上も昔の絵と自分が意外と遠くないと感じました」

階で、準備や乾燥を待つあいだに失われる気がしていたという。大学院に進学したころから新たな画材を探し、オイルパステルに出会う。子どものときに親しんだクレパスを思い出させるような発色のよさとやわらかさで、油にも溶け、キャンパス上で消しやすいため、失敗をおそれず、モチーフから受けた新鮮な印象をすばやく表現できるようになった。ヤマゴボウやタンポポなど道端の雑草を描くようになったのも、ほぼ同時期のことらしい。以後、オイルパステルと油彩、水彩の併用からつまれるあざやかな、あたたかな、そしておいたような色彩の「植物画」が彼女のトレードマークとなっていく。

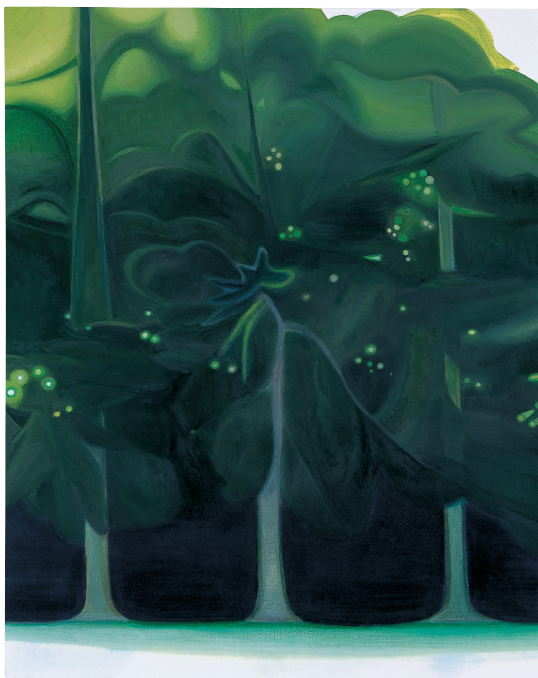
すでに学生時代に関西の画廊での個展経験があったものの、事実上の作家デビューは1995年3月、東京のINAXギャラリー2での個展となる。大学院修了制作を中心にした展示だったが、そこで押江はそれまでにない経験をしたという。京橋という立地、そしてINAXの新人発掘への積極的な姿勢もあって、数多



ベルギーでの美術学校の進級展より(2004年6月) 北部の町ゲントにある聖バーフ寺院の地下聖堂のステンドグラスを描いた水彩画を展示した

くの観客が会場に足を運び、作品が売れ、またたくさんの方の反応があった。そして、作家として知名度がなくても、作品だけで判断してくれる空気が東京にはある」と実感する。自分の創作が人に見られ、対話が始まるよろこび。以後、大阪に住まい続けながらも彼女の発表の場は東京がメインとなる。

ところで、彼女の「植物画」で色彩とならんで魅力的なのは、「タイトル」だろう。好きな美術家を尋ねると、「ボックエーは色彩やもの見方がおもしろく、学生時代から関心を持



2006

「自分の目で見える確かさを信じながら、
『ふつうの風景』に目をすましていきたい」

夏のなみき 2006 キャンバスに油彩、オイルパステル、
オイルバー、ジェットン 90.9×116.7cm
撮影 = 内田芳孝 写真提供 = 西村画廊

ていたけれど、実際の制作になると
ほかの人の絵からというよりむしろ
文学から影響を受けていると思いま

す。谷川俊太郎がつくりだす語感が
好き。武田百合子のような絵を描き
たい。彼女が普通の生活のなかから
淡々と、見たまま、感じたまま書き
ながら、普通ではない世界を表現し
ているのがとてもうらやましいこと答
えた。タイトルは、制作をおぎなう
ことば」と彼女はいうが、いずれも
散文的で、ひらがな中心の独特のリ
ズムを持っている。確かに、アトリエ
にはこうした作家の著作が並ぶ。
押江の作品集「目をすまず」(求龍堂
2003)のタイトルも、谷川の創作か
ら発想したものという。

2001年、それまでの約5年強
の彼女の作家活動がいきに認めら
れ、「第11回タカシマヤ美術賞」「VO
CA賞」「京都市芸術新人賞」の3つ
の受賞が続いた。この「トリプル受
賞」こそが、つぎの段階に脱皮するた
めの一步を踏み出すきっかけになっ
たのかもしれない。制作場所を変え、
海外で生活することに向け、旅した

り、渡航を支援する助成金の申請な
どの準備を始めている。

留学先には日本から比較的近く、
時差も少ない、花の豊かなマレーシア
なども考えたようだが、最終的に西
ヨーロッパでも比較的緯度の高い、ペ
ルギーを選んだ。リュック・タイムンス
などのベントナーへの関心、そして彼
女自身も01年秋と02年春に出かけ
たヨーロッパ旅行で立ち寄り、その風
景やヤン・ファン・エイクの祭壇画《神
秘の子羊》などに魅せられたからと
いう。そこから描かれた水彩による
みずみずしい風景画は、03年「旅の
空」と題した個展に出品され、「植物
画」からの展開を予感させた。

その後、03年10月から05年9月の
あいだ、押江は、文化庁新進芸術家
海外留学制度の研修員としてベルギ
ーの首都ブリッセルに滞在した。山
がみえない平らな土地柄、長く寒い
冬、たれこめる曇天。彼女はヒザの
関係もあって美術学校に在籍し、休
暇の時期には南欧にも足を伸ばし
た。2年間の滞在中、制作は水彩で
のドローイングが中心で、ほとんど

おしえ・ちえこ 1969年大阪生まれ。95年京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。おもな個展に、92年ギャラリーすずぎ(京都)、95年INAXギャラリー2(東京)、96-97年ギャラリー山口(東京)、97年-西村画廊(東京)ほか。グループ展では、96年「VOCA展'96」上野の森美術館、「心を癒す植物 アート・ボタニカル・ガーデン」(目黒区美術館・東京)、98年「絵画の方向'98」(大阪府立現代美術センター)、2000年「プライム:記憶された色と形」(東京オペラシティアートギャラリー)、01年「VOCA展2001」(上野の森美術館)、「群馬青年ビエンナーレ'01」(招待部門) (群馬県立近代美術館)、「色の博物誌・緑 豊潤な彩」(目黒区美術館) 02年「タカンマヤ美術賞展」(日本橋高島屋ほか)、「京都市芸術新人賞受賞作家展2002」(京都市芸術センター) 03年「MOTアニュアル2003 おだやかな日々」(東京都現代美術館)「みどりのちから 日本近現代絵画にみる植物の表現」(群馬県立館林美術館) 04年「大阪・アート・カレイドスコープ」OSAKA 04」(大阪府立現代美術センター/海岸通ギャラリー・CASO) 05年「カラフル!こどもとおとなの美術入門」(群馬県立近代美術館)ほか



大阪・枚方のアトリエにて。背景の壁に水彩や油彩による近作、手前には取材直前まで描いていたという貝母百合(バイモユリ)とスケッチ。[*]

油彩画を手がけていない。当初の、現地でいろいろ見ようという思惑とは違って、かえって自分の内面をみつめ直し、これまでの体験や制作を相対化する時間になつたという。

大学院修了と同時にデビューの機会を得て順調に個展やグループ展に恵まれた押江だったが、実際には想像以上に制作に時間を要し、また強いプレッシャーのなかでの全力疾走だった。そしてそれをいつも家族が支えていた。それが異国でまたくのひとりになって直面したのは、「日常生活」だらたという。フランス語、フラマン語、英語が飛び交うブリュッセルの街で、衣食住を自分で段取りすることの困難は、察してあまりある。もともと「日々の生活を営むように、絵を描いてゆきたい」と願っていた彼女にとつて、ベルギーでの2年間は「描くように自然に、生活」していくことの試練^{レッセル}だらたのかもしれない。これからの制作について、彼女はまず油彩表現への関心をあげた。油彩技術の発祥の地ともいうべきベルギーで見たファン・エイクやメムリン

クの濃密な印象。そして、描くテーマは、自分の目にしたものの断片になるだろうという。自分がこれまで経験したいろいろな風景を扱つが(そこに植物も含まれる)、「具体的な地名にはこだわりません。描きたいものを描きたい」とのこと。アトリエの壁には、滞欧中に撮影した写真がパノラマのようにいくつも貼られていた。そうした写真や記憶から描くこともあれば、いま、ふつ々の生活に戻つてその周囲の自然にも取り組むけれど、写真から描けることと、直に見て描けることは、見る人への伝わり方が違うと思う。06年になつて完成した油彩「夏のなみき」や、制作途上の水彩画には、いずれもみずみずしい緑の色彩が輝いていた。

帰国後の個展第一弾は来年春という。なんでもない、静かな、ふつ々の風景」をもとめての長い長い「旅」を終え、自分のペースで制作することに目覚めた作家の、絵を描きたい気持ち^{はやしよつ}あふれる展覧会を期待したい。

3月24日、大阪・枚方の作家アトリエにて取材